テンプス

２０１１年（平成 23 年）46 号

感田神社

湯神楽神事の様子

も　く　じ

貝塚寺内周辺登録文化財地図

孝恩寺の仏像　－如来③　阿弥陀如来－

古文書をひも解く
　江戸時代の農作物ー甘い作物「西瓜」を考えるー

古文書講座

第 94 回かいづか歴史文化セミナー
感田神社「貝塚宮」湯神楽神事　現地見学会

貝塚寺内周辺登録文化財地図

⑨竹本家住宅（西町）

竹本家は当初の住人の職業は不明ですが、卜半家家来の屋敷であった可能性があります。

⑧尾食（おめし）家住宅

尾食家は江戸時代に旅籠（はたご）屋や金融業を営み、明治時代には干鰯（ほしか）屋や木綿仲買などを営んでいました。

⑩吉村家住宅

吉村家は江戸時代に油屋や金融業を営んでおり、今も金融業を営んでいたころの面影が残っています。

⑪廣海（ひろみ）家住宅

廣海家は江戸時代に穀物や肥料を取り扱う廻船問屋を営み、一街区（いちがいく）を占める敷地を誇ります。

⑫名加（なか）家住宅

名加家は大正頃まで木櫛の卸問屋業を営んでいました。二棟の家屋が違和感なく統一されています。

⑬南川家住宅

南川家住宅は当地域の近代初頭から昭和初期までの住宅の様子が窺える貴重な建物といえます。

⑭寺田家住宅

寺田家は大正時代に鉄工所を営み、寺田財閥の遺構の一つとして位置づけられます。

☆本市新町にあります寺田家住宅主屋ほか計７棟が、平成 23 年７月 25 日に、国登録有形文化財の指定を受けました。このことにより、貝塚寺内周辺の国登録有形文化財は 14 件になりました。

①感田神社

感田神社は伝統的な様式で建築された建造物群がまとまってあり、統一性のある境内の景観が形成されています。

※戦前の貝塚町空中測量をもとにしているので、現在とは異なります。

②並河（なみかわ）家住宅

並河家は代々ト半家の重臣で、近代には貝塚町や泉南郡役所の役人を務めており、式台が今も残っています。

③山田家住宅

山田家はもとト半家の家来で江戸時代からは古美術商を営んでいました。すり上げ大戸が特徴的です。

④竹本家住宅（北町）

竹本家は昭和まで木櫛製造業を営んでいました。屋敷は時代の異なる東西の棟に分かれています。

⑤利齋（りさい）家住宅

利齋家は江戸時代に薬種問屋を営んでおり、18 世紀前半に遡る家です。

⑦宇野家住宅

宇野家は江戸時代以来、鋳物（いもの）業を営み、ト半家の狂言方も務めた旧家です。

⑥岡本家住宅

岡本家は江戸時代に醤油製造業を営み、寺内町の年寄役も務めました。

貝塚寺内周辺登録文化財一覧

①感田神社（中）
末社一之社本殿ほか計 12 棟
平成 20 年 10 月 23 日登録
〔末社一之社本殿〕安永２年（1773 年）
〔末社三之社本殿〕・〔末社四之社本殿〕・〔末社五之社本殿〕万延元年（1860 年）
〔神輿蔵〕明治中期、〔神楽殿〕昭和 29 年（1954 年）、〔神馬舎〕宝暦８年（1758 年）
〔参集殿〕明治 15 年（1882 年）、〔齋館〕昭和 10 年（1935 年）
〔神門〕安永９年（1780 年）、〔土塀〕江戸後期、〔南門〕明治 22 年（1889 年）

②並河家住宅（北町）
主屋ほか　計２棟
平成 15 年３月 18 日登録
〔主屋〕天保３年（1832 年）
〔土蔵〕江戸時代後期

③山田家住宅（北町）
主屋　１棟
平成 15 年３月 18 日登録
〔主屋〕江戸時代末期

④竹本家住宅（北町）
東主屋ほか　計２棟
平成 15 年３月 18 日登録
〔東主屋〕江戸時代末期
〔西主屋〕昭和７年（1832 年）頃

⑤利齋家住宅（北町）
主屋ほか　計３棟
平成 15 年３月 18 日登録
〔主屋〕江戸時代中期
〔離れ〕大正 13 年（1924 年）頃
〔土蔵〕江戸時代後期

⑥岡本家住宅（北町）
主屋ほか　計５棟
平成 15 年３月 18 日登録
〔主屋〕江戸時代中期
／天保 12 年（1841 年）増築
〔座敷〕　明治時代、
〔新蔵〕安政４年（1857 年）
〔中蔵〕江戸時代中期
〔北蔵〕　江戸時代後期

⑦宇野家住宅（北町）
主屋ほか　計６棟
平成 15 年３月 18 日登録
〔主屋〕江戸時代末期
〔茶室〕大正時代
〔東土蔵〕江戸時代末期
〔西土蔵〕明治時代
〔工場〕大正時代
〔高塀〕明治時代

⑧尾食家住宅（北町）
主屋ほか　計２棟
平成 15 年３月 18 日登録
〔主屋〕天保 10 年（1839 年）
〔離れ〕江戸時代末期

⑨竹本家住宅（西町）
主屋　１棟
平成 15 年７月１日登録
〔主屋〕江戸時代末期

⑩吉村家住宅（西町）
主屋ほか　計３棟
平成 15 年７月１日登録
〔主屋〕江戸時代中期
／江戸時代末期増築
〔道具蔵〕江戸時代末期
〔衣装蔵〕江戸時代末期

⑪廣海家住宅（西町）
主屋ほか　計８棟
平成 15 年７月１日登録
〔主屋〕文久元年（1861 年）
〔居間蔵〕江戸時代末期
〔中蔵〕江戸時代末期
〔下蔵〕江戸時代末期
〔新蔵〕明治時代後期
〔離れ〕明治時代後期
〔納屋〕明治時代中期
〔高塀〕明治時代前期

⑫名加家住宅（南町）
主屋ほか　計２棟
平成 20 年４月 18 日登録
〔主屋〕18 世紀中期～後期
〔離れ〕明治４年（1871 年）
～５年（1872 年）

⑬南川家住宅（新町）
主屋ほか　計２棟
平成 19 年 10 月２日登録
〔主屋〕昭和４年（1927 年）
〔離れ〕明治時代初期

⑭寺田家住宅（新町）
主屋ほか　計７棟
平成 23 年７月 25 日登録
〔主屋〕昭和 11 年（1936 年）、〔新宅〕昭和 33 年（1958 年）、〔内蔵〕昭和 11 年（1936 年）
〔外蔵〕昭和 11 年（1936 年）、〔納屋〕昭和 11 年（1936 年）、〔本門〕昭和 11 年（1936 年）
〔石垣塀〕昭和 11 年（1936 年）

孝恩寺の仏像　－如来③　阿弥陀如来－

貝塚市木積(こつみ)の孝恩寺には、平安時代の制作で地方色豊かな 19 躯(く)の仏像が安置されており、うち 18 躯が重要文化財に指定されています。

今回は、如来像のうち阿弥陀如来立像を紹介します。如来は修業によって悟りの境地に達して仏となったもののことで、頭部が隆起した「肉髻」(にっけい) など 32 の身体的特徴を持っています。もともとは仏教の開祖である釈迦如来のみでしたが、後に阿弥陀如来や薬師如来などの複数の如来が生み出されました。

【重要文化財】木造 阿弥陀如来立像　１躯

時　　代　平安時代後期
像　　高　１４１．０ｃｍ
指定年月日　昭和 13 年（1938 年）８月 26 日

阿弥陀如来は、もとは釈迦如来と同じく古代インド王族の出身で、日本では念仏を唱えれば極楽浄土に往生できるという阿弥陀信仰の流行から、浄土宗や浄土真宗などの宗派の本尊として現在も広く信仰されています。

本像は、通肩（つうけん）の上から偏袒右肩（へんたんうけん）の衣を着し、下半身には裳（も）をつけ、いわゆる来迎印（らいごういん）とよばれる印をむすんで直立した姿をしています。

制作技法は一木造で、頭頂から裾先まで、両袖口を含んで、カヤの一材で彫り出し、両手首先と両足先のみ後世に制作された新しい材で補なわれています。内部には内刳り（うちぐり）はほどこさず、全身にはところどころに白土（はくど）が残っているため、本来は彩色仕上げであったものと思われます。

量感に富んだ体つきをしていますが、面部をはじめ、袖部等の翻波式衣文（ほんぱしきえもん）や両脚部のＹ字状衣文はいずれも彫りが浅く穏やかな表現であることから、本像の制作は平安時代 10 世紀後半頃と考えられています。

また、頭部の螺髪（らほつ）は、前頭部は整然としており丸味を持つものの、後頭部は賽（さい）の目状に彫られたままであり、本像が正面からの礼拝のみを期待されて制作されたものと思われ、興味深い部分です。

＜用語解説＞
・通肩：二枚の衣を体に巻きつけて両肩を包む着衣の形。
・偏袒右肩：右肩をあらわにする着衣の形。
・内刳り：乾燥による干割れを防ぎ、重量を軽くするために内部を刳りぬくこと。
・翻波式衣文：大波と小波が交互に寄せるような衣のひだの表現法。
・螺髪：螺旋状の貝殻のような如来の頭髪のこと。

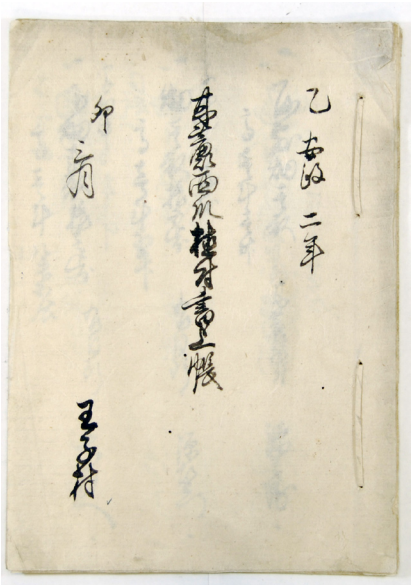
古文書をひも解く

◆江戸時代の農作物－甘い作物「西瓜（すいか）」を考える－

夏の食べ物といえば・・・。黒と緑のしま模様といえば、そう「西瓜」です。

「西瓜」は熱帯アフリカ原産のウリ科の植物で、日本へは天正７年（1579 年）に伝わったとされ、畑地に広く栽培されています。

こうして西瓜栽培は江戸時代に広まっていきました。寛政８年（1796 年）から同 10 年にかけて刊行された『摂津名所図会』には、「鳴尾西瓜」が土地の名産として紹介されています。鳴尾は摂津国の西部（兵庫県になった摂津国の地域をのちに西摂と呼びました）の海沿いの村で、現在の西宮市鳴尾に当たります。泉州から見ると、淀川を軸に大坂湾の向こう側に位置します。白い砂と青い松「白砂青松」（はくしゃせいしょう）の広がる海岸は西摂（せいせつ）・泉州ともによく似かよっています。



甘蔗西瓜植付書上帳（要家文書）

鳴尾西瓜同様、泉州でも西瓜栽培が盛んであったらしいことが、次の史料から読み取れます。

安政２年（1855 年）４月、王子村年寄３名から岸和田藩地方奉行（じかたぶぎょう）に対して提出された「甘蔗西瓜植付書上帳（かんしょ・すいかうえつけかきあげちょう）」の控えには、甘蔗（＝さとうきび）・西瓜の植え付けた場所（地字）・面積・石高・耕作者の名前が、こと細かに書き上げられています。また、奉行らに提出したものに偽りがないことを主張し、「見分」（実際に村々にやってきて取り調べること）を求めています。

これは、本来、稲作・木綿作をすべき本田（ほんでん）へは植え付けを厳重に禁止し、水の利が得られず五穀の栽培に適さない畑や屋敷地などでの栽培に限定されていたためです。史料から、王子村の西瓜栽培の高は３石５斗３升７合８勺で、村高（安政２年当時）の 662 石４斗７合の、わずか 0.5％に過ぎない生産量であることがわかります。このことからも、地方奉行が、岸和田藩領全体を厳しく取り締まり、本田には一切植え付けさせないという姿勢を表しています。

この頃西瓜は人気が高く、暑い夏を乗り切る清涼剤としての役割を持ち、高値で取り引きされたことから、本田にまで植え付けようとする人びとが現れ、このような制限がなされるに至ったと考えられます。

古文書講座

◆「北前船（きたまえぶね）と貝塚」

平成23年５月25日（水）から５回にわたり、「北前船と貝塚」と題して古文書講座を開催しました。

北前船とは、江戸時代から明治時代にかけて、上方と北陸、東北の日本海沿岸、北海道との貿易をおこなう廻船のことで、貝塚へも寄港していました。

貝塚では米穀肥料商を営んだ廣海惣太郎（ひろみそうたろう）が北前船を所有し、遠くは北海道の小樽まで買い付けに出掛けました。

テキストとしては、廣海家で「はしけ乗り」として働いた奉公人が出した請け状のほか、箱館産物会所（はこだてさんぶつかいしょ）の加入願（北海道近海で水揚げされ肥料に加工されたにしん粕を貝塚まで運んでくるのに必要だった）、北前船の所有権の譲渡契約書、にしん粕など北海道方面からの積み荷に関する記録などを取り上げ、当時の時代背景を掘り下げるとともに、廣海家の商業活動などを明らかにしました。

講座の参加者からは、「廣海家の商いは、肥料だけでなく色々な品を扱っていたことや、流通のしくみなども新しく知ることができて楽しかった。」「時代背景がわかることにより、文書が書かれた内容がよくわかりました。」といった感想をいただきました。

古文書講座（第37回）開催のお知らせ

◆「江戸時代の農作物」

江戸時代には、主食の米をはじめ、綿、茶、桑、果物、野菜などさまざまな農作物を育て、収穫し、年貢として納めたり、商品作物として販売したりしました。江戸時代の泉州地域における農作物の動向を探っていきます。

日　　時：第１回　平成23年９月28日、第２回　10月５日、第３回　10月12日
　　第４回　10月19日、第５回　10月26日
　　いずれも水曜日午後２時～４時30分
会　　場：貝塚市民図書館２階視聴覚室
資 料 代：100円
申　　込：住所、氏名、電話番号を明記の上、はがき・Ｅメール・ＦＡＸ、電話いずれかで、
　　下記まで事前にお申込みください。

連絡先　〒597-8585　貝塚市畠中１丁目12－１（貝塚市民図書館２階）貝塚市郷土資料室
　　ＴＥＬ　072（433）7205 ／ ＦＡＸ 072（433）7107
　　Ｅmail　shiryoushitsu ＠ city. Kaizuka. lg. jp

第94回かいづか歴史文化セミナー

感田神社「貝塚宮」湯神楽（ゆかぐら）神事　現地見学会

感田神社の夏の例祭である「貝塚宮」は、各氏子町から太鼓台が担ぎ出されることから、「貝塚宮・太鼓台祭り」として広く知られています。平成23年度は7月16日（土）・17日（日）に挙行されました。

宵宮である16日には、教育委員会主催の現地見学会を開催し、境内の登録有形文化財建造物および午後3時から挙行された湯神楽神事を見学しました。

湯神楽神事は、『古事記』『日本書紀』の神話として有名な天の岩戸伝説を起源とする神楽の一つで、巫女が笹の葉で釜の湯を参拝者にふりかけて、夏の無病息災を祈願する「夏越の祓」（なごしのはらえ）の神事です。当日は神事に約80名、見学会には22名の参加者があり、各々がふりかけられた湯で半年間の罪やけがれを払い、夏以降の無病息災を祈願しました。

広告募集中

50mm × 80mm（最終ページ）　1枠

50mm × 175mm（2～7ページ）　6枠

詳しくは社会教育課文化財担当までお問合せください。

かいづか文化財だよりテンプス46号

平成23年8月31日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585　貝塚市畠中1丁目17－1

Tel（072）433-7126　Fax（072）433-7107

Email:shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印　刷：㈱帯谷印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：　37.80円